

平成30年度 学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	<input type="checkbox"/> 共同研究推進 <input checked="" type="checkbox"/> 若手教員研究支援 <input type="checkbox"/> 個人研究支援 <input type="checkbox"/> 研究推進重点設備 <input type="checkbox"/> 研究推進設備修繕
プロジェクトの名称	「絶対音感教育」の国民学校芸能科音楽（公教育）への導入の経緯
報告者氏名・所属・職名	長尾 智絵・ 函館校・ 准教授
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	長尾 智絵・ 函館校・ 准教授
研究内容及び成果の概要	
<p>本研究は、昭和10年代に流行した「絶対音感教育」の国民学校芸能科音楽（公教育）への導入過程について解明を目指すものである。</p> <p>まず、国民学校芸能科音楽（以下、芸能科音楽）に採り入れられたとされる「絶対音感教育」は、笈田光吉が確立させた「絶対音感教育」と同一なのか否か、あるいは変容だったのかという問いを明らかにするため、昭和12年から武蔵野高等女学校で実施された一宮道子の「絶対音感教育」と、芸能科音楽における聴音練習の教育課程とを比較した。その結果、両教育法では、「絶対音感教育」で注目されていた絶対音感の養成ではなく、絶対音感養成のための和音感訓練および和音合唱、和音合唱を歌唱（合唱）指導と連携させる点において共通していることが明らかになった。絶対音感の養成は、「絶対音感教育」の主要な項目とされながら、集団で行う公教育での音楽教育には適しておらず、一宮の実践で省略された項目である。芸能科音楽の聴音練習においても、この点が共通していた。このことから、一宮の実践では、絶対音感養成ではなく、合唱訓練を重視し、それと歌唱指導と直結させたことで、従来の唱歌教育と対立することなく国民学校での実践にも適用する可能性を開いたとみることもできる。ただし、和音感訓練のうち、「和音分離唱法」と「和音分割唱法」については「単音抽出唱」「分散和音唱」と、名称とその内容が変容していることがわかった。この変容については、堺市の視学、佐藤吉五郎の実践が関わっているとみられるが、その詳細について、また、芸能科音楽の教育課程成立に関して、どのような人物が関わり、どのような経緯で聴音練習が取り入れられたのかなどについては引き続き課題としたい。</p> <p>また、今回の研究課題に関連して、日本ハリストス正教会の合唱指導に注目した。正教会の音楽については、明治期、いち早く四部合唱がなされ、高度な演奏技術をもち、日本の洋楽受容に影響を与えたとされているものの、大正期以降について研究の蓄積があまりない。そこで、昭和初期に正教会の音楽を、一般に広く公開しようと奮闘した加藤直四郎（1908-2009）の活動に注目した。その結果、正教会の合唱指導は、音高に対して厳格さを求めるものであったことが明らかになった。「絶対音感教育」との直接的な関係については、今後さらに調査を進める</p> <p>以上より、本研究課題の成果は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> 国民学校芸能科音楽における聴音練習の教授内容について、合唱指導のための聴音練習という文脈でみることによって、「絶対音感教育」が公教育に及ぼした影響と成果について、昭和10年から昭和40年頃までの音楽教育史を大筋で見通せるようになった。 合唱指導との関連が明らかになったことで、昭和10年から突然はじまったとされる「絶対音感教育」と日本ハリストス正教会の合唱指導との関連について考察する基本情報が得られた。 	
成果の公表の状況	
<p>【学術論文】</p> <p>①長尾智絵，加藤直四郎と日本ハリストス正教会の合唱，北海道教育大学紀要（養育科学編）第69巻2号，平成31年，pp. 219-228.</p>	

②長尾智絵, 国民学校芸能科音楽の「聴音練習」と一宮道子による音楽教育との関連について, 学校教育学会誌 第23号, 平成31年, (印刷中)	
教育現場で活用可能な分野・教材等	
合唱は音楽の授業や学校行事と密接な関係にある。そのため、合唱指導の歴史的な文脈を研究することで、学校における音楽する場面（授業や学校行事、課外活動等）に活用できる。	
配布又はダウンロード可能な資料	
問合わせ先	代表者：長尾 智絵 電 話：0138-44-4304 FAX : mail : nagao.chie@h.hokkyodai.ac.jp